



### 40 ライオンとネズミ (マケドニアの昔ばなし)

ある時、一頭のライオンが木に縛られてもがいていました。  
 ネズミがライオンにわけを尋ねましたが、「とっとと消え失せる!めざわりなやつめ!」と追い払われました。  
 ネズミは「なぜあなたが苦しんでいるのかを聞かせてください。  
 私でもお役に立てるかもしれません。」と熱心に聞きました。ライオンは答えました。  
 「狩人どもがわしを捕らえて縄で縛りつけおった。おまえなんぞに、わしを助けられるわけなからう!」  
 「理由はそれだけですか?ならば私があなたを自由にしてさしあげましょう!」  
 ネズミはライオンの首にとびあがって、またたくまに綱をかじり切りました。  
 自由になって逃げたライオンは、驚いて言いました。  
 「百獣の王のライオンであるわしでさえ、ときには小さなネズミに恩義を受けることがあるのか!」

弱いネズミに救われた、  
 強いライオンでした。

### ローム君の新・博物日記 第40話

### 世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

### おしらせ

バックナンバーは、  
 ロームの文化支援のサイトで  
 ご覧いただけます。  
[www.rohm.co.jp](http://www.rohm.co.jp)へアクセス

#### ●弱いものが必ずしも弱くない世界。

「ライオンとネズミ」は、主にアフリカやヨーロッパに分布し、世界中にも類話が見られます。この昔ばなしは、昔ばなしで好まれる典型的なモチーフが核になっています。それは「弱い者が必ずしも弱いとは限らず、知恵を使って力を発揮することがある」というもの。例えば日本の昔ばなし「寝太郎」では、眠ってばかりいてバカにされていた寝太郎に、村を救うアイデアが夢の中でひらめきます。また、西洋でも愚か者の末弟が最後は成功するという昔ばなしが数え切れないくらいあります。ギャップがあるからこそ物語は面白くなるのはもちろんですが、そこには外観と本質は違うこともある、という昔の人々の「人間観」が色濃く反映されています。それは、時代が変わった現代の私たちにも共感できるものですね。

#### ●やはりライオンは百獣の王だった。

ヨーロッパでは強さと勇気象徴であるライオン。その実力も相当なもの。同じネコ科の猛獣チーターの獲物を、しばしばライオンは、簡単に横取りするそうです。ヒョウも、獲物をいそいそと木の上に持ち上げてから食べるのは、特にライオンに横取りされないように警戒してのこと。アフリカ象が一番警戒しているのはライオンで、子象はもちろん、大人でも集団で倒されることがあります。また、生息地は違いますが、仮にオスのライオンとトラが闘っても、ライオンが有利なようです。

力はほぼ互角ですが、たてがみの有無が勝敗を分けそう。硬くてクッション性のあるたてがみは、人間の力で押さえても下の皮膚までは届きません。これで致命傷となる首へのダメージがかなり軽減されるのだとか。ライオンは、やはり百獣の王と称されるだけのことはあるようです。

#### ●ギリギリで生きている王様。

そんなライオンも、実際の生活は王様とはかけ離れたもの。子どもが成獣になる確率はかなり低く、多くは飢えて死んでしまいます。狩りをする能力は高いものの、多くの草食動物の走行速度はライオンよりも勝っていて、逃げられることもしばしば。ライオンは弱っている獲物を見極めて、仲間と連携し、一気に勝負をかけなければなりません。しかし、狩りの未熟なライオンは後ろ足でアゴの骨を割られたり、牙が折られたりしてしまいます。そうなったライオンは数週間で死んでしまうのです。だからこそ、ライオンは小さな頃から遊びを通じて狩りの方法を相当訓練しなければなりません。ライオンの暮らしも決して楽ではないんですね。かつてはアフリカからヨーロッパ、インドなどにも生息したライオンも、今はアフリカとインドの一部に生息するのみ。一方、ネズミの仲間は世界中にいて、哺乳類で一番種類が多い生き物です。繁殖能力に関してなら、昔ばなしのようにネズミもライオンから一目おかれそうですね。

昔ばなし監修/昔ばなし研究所所長 小澤俊夫  
 取材協力/日本動物科学研究所 今泉忠明